

大学祭における「猫カフェ」の効果

—「猫カフェ」体験型のAAE（動物介在教育）が来場者に及ぼす影響—

今 野 洋 子（北翔大学・北翔大学北方圏学術情報センター）

尾 形 良 子（北翔大学・北翔大学北方圏学術情報センター）

要 約

本研究は、大学生が関わる動物介在教育（Animal Assisted Education, 以下AAEと表記する）実践として、大学祭において実施した「猫カフェ」における体験が、来場者の気分に及ぼす影響を分析することを目的とした。

大学祭における猫カフェに訪れた計114名（男性30名・女性84名、平均年齢 21.0 ± 6.83 歳）を対象に質問紙調査を実施し、以下の諸点を把握した。

1. 来場者の86.0%に動物の飼育経験（26.5%に猫の飼育経験）があり、動物に興味関心のあ
る者が猫カフェに訪れた。
2. 猫カフェでの体験は、「触った」（72.8%）, 「見た」（65.8%）が多く, 「一緒に遊んだ」
（19.3%）や「抱っこした」（7.0%）は少なく, 「抱っこした」者には, 猫の飼育経験を持
つ者が多かった。
3. 来場者の感想の「かわいかった」（71.1%）から猫の愛らしさ, 「癒された」（63.2%）,
「和んだ」（60.5%）等からリラクゼーション効果, 「ふわふわしていた」（50.9%）「やわら
かかった」（44.7%）等からのリラクゼーションに結びつく触感, 「楽しかった」（34.2%）
「うれしかった」（30.7%）から喜びが得られた。
4. 猫を「触った」「抱っこした」「一緒に遊んだ」者は, 直接的な触感の心地よさやリラク
ゼーション効果が得られたが, 猫を「見た」だけでも, リラクゼーション効果が得られた。
5. 「猫カフェ」という場で初めて出会った猫に対して, 来場者はリラクゼーション効果を得,
喜びを感じていた。
6. 猫カフェで過ごしたことによって, 動物を飼いたいと思う者が増加した。

これらの結果から, 「猫カフェ」滞在型AAEは, 初めて会う猫であっても, 来場者の気分
に影響を及ぼし, リラクゼーション効果につながることを, および動物飼育に対する興味関心が
高まることが示された。

キーワード：動物介在教育 猫カフェ リラクゼーション

I. は じ め に

人は前史の頃から動物とともに暮らしてきた長い歴史を持つ。

変化の激しい現代社会において, 動物とのふれあいは, 豊かな自然とともにあった人間の古い歴史を喚起してくれる。あるいはストレス社会ともいわれる現代において, 動物とのふれあいは治療的な価値を持ち, 自分自身を理解することにも役立つ¹⁾。このような動物とのふれあいの効果に着目した動物介在療法や動物介在活動および動物介在教育が盛んになっている。

本稿は, 大学において実践した「猫カフェ」体験型動

物介在教育について述べるものである。

動物介在教育（AAE: animal assisted education, 以下AAE）は, 人と動物の相互作用国際学会（IAHAIO: International Association of Human-Animal Interaction Organizations）の2001年リオデジャネイロで開催された大会において, 「学校において動物と接する活動」と定義された²⁾。主に, 獣医師やボランティアなどで構成されるチームが小中学校へペットを連れて訪問することを通して, 子ども達に動物とのふれあいを推奨し愛護精神を培う教育と学校での動物飼育とを総称したものである。

このような動物介在教育に関する学術的研究では, Poresky ら（1988）が, 小学生の時期に動物と触れ合う

体験を持つものは、青年期においても自己効力感や自尊感情が比較的高い傾向にあることを示しており³⁾、Zasloff&Kidd (1994)は大学生が動物と触れ合うことによって抑うつ不安の低下、活気の増加への変化がみられたことを示している⁴⁾。また、小学校での動物飼育が子どもたちの豊かな感性を養い「命の教育」に有効なことが確認⁵⁾され、ホースセラピー等は、子どもたちの心の優しさを引き出す⁶⁾だけでなく、重複障害を持つ子どもたちに対してADL(日常生活向上)を向上させる等の効果も報告⁷⁾されている。このように動物を介在することが人間の心理や体調によい作用を促すことから、近年、教育場面や臨床場面への適用が試みられている。

そこで、動物介在教育の一環として、大学祭において、福祉心理学科臨床心理コースおよび福祉心理学科コース並びに臨床心理センター合同企画「猫カフェ」を開催した。本研究では、その効果について分析することを目的とする。なお、「猫カフェ」体験型AAEでは、大学祭企画の「猫カフェ」来場者は大学生だけでなくそれ以外の者も含まれるが、本研究では「猫カフェ」体験の効果に重点を当てることから、全来場者について分析する。

ところで、「猫カフェ」とは、室内に放し飼いにされた猫と戯れることのできる喫茶店を指し、「猫喫茶（ねこきっさ）」とも呼ばれる⁸⁾。猫と同じ空間でくつろぐことができ、猫に癒される場所と考えられている。なお、台湾の台北市にある「猫花園」が日本の猫カフェの原型とされている。

II. 方 法

2008年8月2日（土）10：00～16：00、本学の福祉心理学科臨床心理コースおよび福祉心理学科コース並びに臨床心理センター合同企画「猫カフェ」来場者を対象に、質問紙調査を実施した。来場者が「猫カフェ」でソフトドリンクや菓子の飲食をし、猫に触れたり、遊んだりした後、会場の出口で質問紙の回答を依頼した。配布・回収数は114部、有効回答数は114部（有効回答率100%）であった。ただし、質問によっては未回答のものもあり、質問毎に有効回答数を示すこととする。

倫理の手続きとして、調査の目的について説明し、学術研究以外で使用しないことを約束し、調査協力の同意を得た。回収した調査用紙は、鍵のかかる部屋で保管し、調査用紙を入れた引き出しは常に施錠し、データ化にあたっては記号を用いて処理した。また、データを入れた USB 等の電子媒体も管理に配慮して取り扱った。

「飼育経験と地域特性」について χ^2 検定を用い、「飼育経験と年代」「飼育経験と男女差」「飼育経験と居住形

態」「猫カフェでの体験と飼育経験」「猫カフェでの体験と感想」について、マクネマーの方法に従って処理した後に χ^2 検定またはフィッシャーの直接確率検定を用いた。

なお、「猫カフェ」として使用した部屋は、莫蔭を敷いて座布団を配置したスペースとソファやイスに座るスペースに分け、入口でスリッパに履き替えて入り、くつろぎながら猫と触れ合うことができるよう工夫した（図1）。猫用トイレは衝立の裏に据え、猫用ベッドや猫ツリー、猫のおもちゃを部屋の中に置いた。

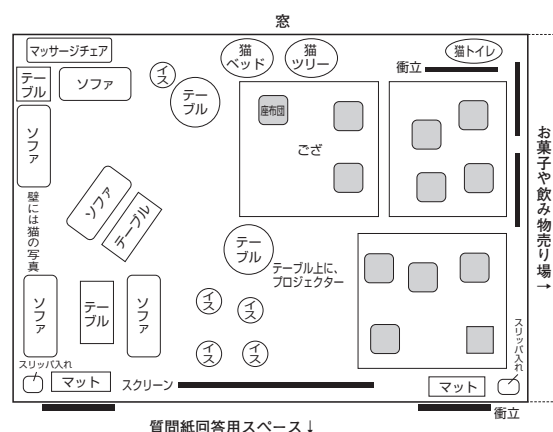


図1 猫カフェ会場図

猫カフェは、飲食の場所が分離している形で確保されている店舗もあるが、日本ではソフトドリンクサービスのための店が殆どである。なお、台湾では食事やお酒を提供する店が殆どである。また、日本では時間制の料金が課金されている店が多い⁹⁾。本研究の対象とした大学祭企画「猫カフェ」では、隣の部屋で飲み物や食べ物（菓子類）を購入し、それらを持って猫のいる部屋に入り、自由に猫との触れ合いや遊びを楽しめるよう、また、猫のDVD 観賞ができるようにし、時間制にはなかった。

「猫カフェ」の猫は4匹で、同一家庭で育てられている猫を用いた。猫たちは予防接種等を済ませ、健康診断の結果、良好であった(表1)。

Ⅲ. 結果と考察

1. 来場者の集団特性

1) 来場者の性別・年齢・出身地

調査対象者となった猫カフェ来場者の性別（有効回答数：114）は、男子30名（26.3%）、女子84名（73.7%）、対象者の年齢（有効回答数：111）は、8歳から56歳までで平均年齢は21.0±6.83歳であった。大学経営企画であ

表1. 「猫カフェ」の猫たち一覧

		ピアノ	ちこ	美々葉（びびは）	虎々冬（ここと）
					
雌	雄	♀	♀	♀	♂
種	類	シャム	Mix	Mix	Mix
毛	の	色	シールポイント	黒	シルバータビー
目	の	色	青	黄緑色	黄色
年	齢	19歳	13歳	2歳	1歳
体	重	2.8kg	2.6kg	2.2kg	4.7kg
予	防	接	種	済（3種混合ワクチン：猫ウイルス性鼻気管炎・猫カリシウイルス感染症・猫汎白血球減少症）	
健	康	診	断	1年に1回必ず受診、検診結果いずれも異常なし	
爪	き	り	済		
獲得済みの技能		・人になでられること ・おもちゃなどで一緒に遊べること ・爪とぎなどや排尿および排便を決められた場所以外でしないこと ・ひざの上に抱かれること			

ることから、10代と20代に集中していた（表2）。特に、15歳から25歳までの者が多く、88.2%を占めた。

表2. 来場者の年齢 (N=111)

年 齢 区 分	人 数	%
10 歳 未 満	1	0.9
10 歳 ～ 19 歳	50	45.0
20 歳 ～ 29 歳	52	46.8
30 歳 ～ 39 歳	3	2.7
40 歳 ～ 49 歳	3	2.7
50 歳 ～ 59 歳	2	1.8

来場者の出身地（有効回答数：112）をまとめたものが表3である。北海道札幌市39名（33.6%）が最も多く、続いて江別市10名（8.8%）であり、千歳市・小樽市等の近郊の市、旭川市等の道央、釧路市等の道東、函館市等の道南に至る市出身者が多く、札幌市・江別市を除く北海道内の市出身者は37名（34.5%）を占め、札幌

市・江別市を含む市部出身者は86名（76.9%）に至った。これに、北海道内の町村部8名（7.1%）および市町村を特定できない北海道出身者8名（7.1%）を併せると102名（94.5%）となり、北海道以外の出身者はごくわずかであった。道外の出身地は、東北・関東・関西と多様であったが、いずれも都市部の者が多かった。

都市部95名（84.1%）・町村部8名（7.1%）等、地域特性をまとめたものが図2である。地域特性による飼育経験の違いをみたが、都市部・町村部ともに有意な差は見られなかった。都市部と町村部の飼育に関しては、かつては都市部よりも郊外に住む者のほうが動物を飼う割合が高かった⁹⁾が、都市生活者の自然環境や動物に触れていたという希望は強いことが考えられた。また、できるだけ自然を大切にしたい都市計画によって、現在では都市部と町村部において飼育に関する差は減少したものと考えられた。さらに、北海道の特色から、都市部であっても動物を飼育しやすい環境にあることが考えられた。

農業動物と異なり、犬や猫などの家庭動物は都市部においても身近な存在であることは、都市生活を送る若年層においても同様であることがすでに報告¹⁰⁾されてい

る。むしろ、都市部居住者は、飼育動物を重要な家族の一員とみなしていることが明らかにされている¹¹⁾。

表3. 来場者の出身地 (N=112)

出身地	人数	%
札幌市	39	34.8
江別市	10	8.9
近郊市	12	10.7
北海道内の市	25	22.3
北海道内の町村	8	7.1
北海道内・地域不明	8	7.1
道外	10	8.9

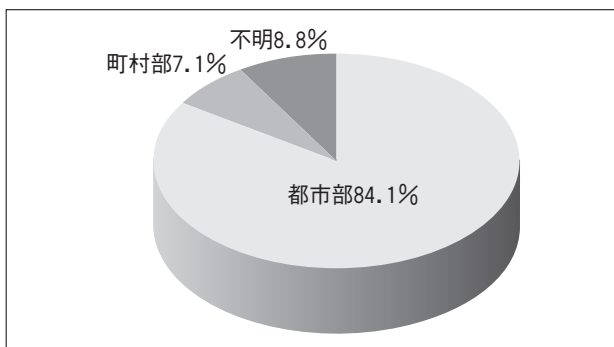


図2. 来場者の出身地の地域特性

している親は何年にもわたってペットが自分に依存し続けることに満足している¹⁴⁾という指摘さえある。しかし、Purvis&Otto (1976) は実際に単身で暮らす人に飼われているのは、犬の総数の5%弱と猫の総数の7%弱であり、子どものいない家庭で飼われているのは犬の総数の9%弱および猫の14%弱であることを明らかにした¹⁵⁾。つまり、飼育動物は子どもの身代わりではなく、重要な家族のメンバーであり、価値ある存在になっている。

なお、近年、たとえば学生が住むようなアパートでも「ペット飼育可」が増加しており、単身世帯であっても、動物を飼育しやすい環境になっていることも影響していると考えられた。

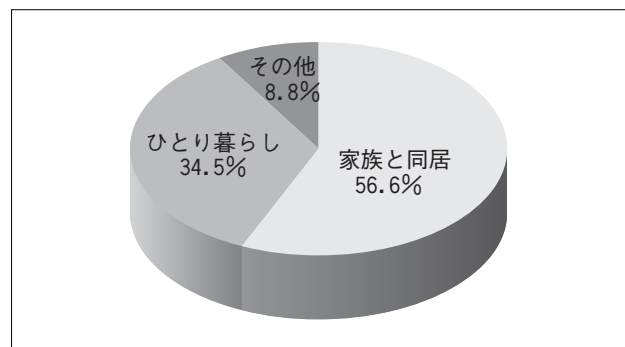


図3. 来場者の居住形態

2) 居住形態

対象者の居住形態（有効回答数：113）についてみると、「家族と同居」64名（56.6%）が最も多く、次いで「ひとり暮らし」39名（34.5%）が多く、兄弟だけの居住や寮の居住者はそれぞれ5名（4.4%）と少なかった（図3）。「家族と同居」および「ひとり暮らし」等の居住形態による飼育経験の違いをみたが、居住形態による有意な差は見られなかった。

これまで、動物の飼育について、家族環境との関連において調査されており、Albert & Bulcroft (1987) は、アメリカでは就学年齢の子どもや十代の子どもがいる家庭で飼育されることが多く、乳幼児など幼い子どもがいる家庭や「エンプティ・ネスト」と呼ばれる子どもが独り立ちした後の家庭での飼育率は低かったことを報告¹²⁾した。Endenburg, Nら (1992) は、オランダでも、同居家族のいる家庭での動物飼育が多かったことを報告¹³⁾している。

「犬や猫は子どもの代用であるという」考えが広く認められており、子どもを育てることができない欠如感を埋めるように動物飼育がされるような解釈がある。「ペットは常に注意を必要とし、ペットが飼い主にもたらす喜びは、部分的には継続して世話をすることから生み出される。必要とされる欲求は協力であり、子育てを

3) 飼育経験

動物の飼育経験（有効回答数：113）については、「現在飼っている」者が50名（44.2%）、これまでに「飼ったことがある」という飼育経験者が48名（42.5%）であった。飼育経験のない15名（13.3%）に比べて、飼育経験者は98名（86.0%）と圧倒的に多かった（図4）。

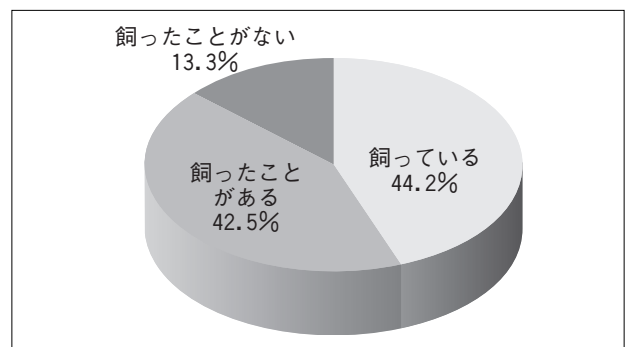


図4. 来場者の飼育経験

飼育経験を男女別にみると、男子は「飼育経験あり」が23名（男子の76.7%）、「飼育経験なし」7名（男子の23.3%）、女子は「飼育経験あり」75名（女子の89.3%）、「飼育経験なし」8名（女子の9.5%）と、女子の方に「飼育経験あり」が占める割合が高かったが、

有意な差は見られなかった。

また、年代別による飼育経験の有意な差は見られず、前項で述べたように居住形態による有意な差も見られなかった。

動物と暮らす人々はそうでない人よりも動物に対してより大きな愛情を持っていることが確認¹⁶⁾されている。現在、ペットを飼っていない人でも過去に飼った経験のある人は、一度もペットを飼ったことがない人に比べてより動物に愛情を示したが、現在ペットを飼っている人に

は及ばなかった。このことから、飼育経験に注目する意義は大きい。

「飼ったことがあるあるいは飼っている動物の種類（複数回答）」（有効回答数：98）は、犬（49.0%）が最も多く、次いで金魚（46.9%）、ハムスター（27.6%）、猫（26.5%）、カブトムシ（23.5%）であった（図5）。

猫の飼育経験に着目すると、対象者の約3割近くが猫を飼っているもしくは飼ったことがあった。

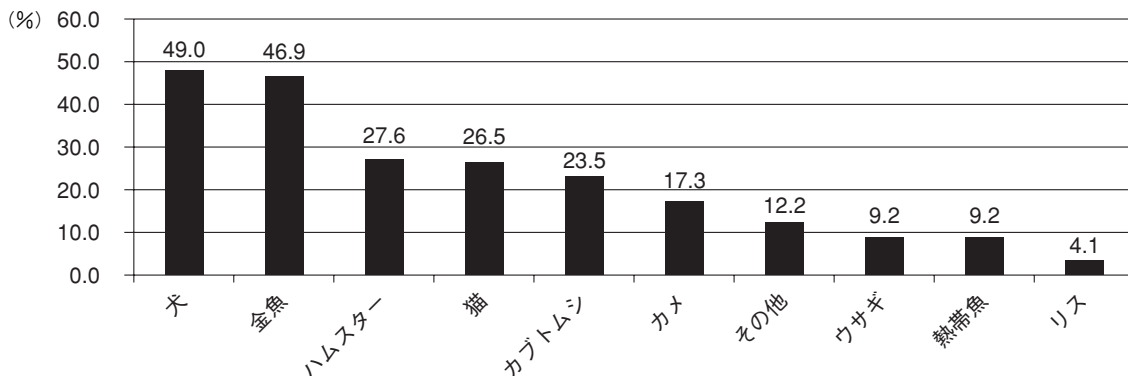


図5. 飼っているもしくは飼ったことのある動物

日本ペットフード工業会調査（2007）によると、現代の日本の2人以上の世帯においては、48%の世帯が、動物を飼っており、全世帯の42%以上が1.3匹以上の犬、30%以上が1.8匹以上の猫を飼育していた¹⁷⁾。同様に、内閣府の調査（2003）では、ペットの種類は、犬62%、猫29%、魚類（金魚・鯉・熱帯魚・海水魚・メダカ等）11%、鳥類（カナリヤ・インコ・文鳥等の小鳥）7%（複数回答）¹⁸⁾であった。

Frost&Sullivan（1980）は、アメリカにおいて世帯の40%以上が1.5匹以上の犬、20%以上が1.7匹以上の猫、15%が2.1羽の鳥、12%以上が25匹の魚を飼っていることを報告¹⁹⁾しているが、国土も家屋も狭い日本においても、アメリカと同様の飼育状況にあり、日本人にとって、小動物が身近な存在であることがうかがえる。

ところで、嗜好される動物の種類とパーソナリティとの関連について、Kidd&Kidd（1980）の報告がある²⁰⁾が、その中で、動物全般が好きな男性と犬好きの男性は外交的で、より支配的かつ攻撃的なパーソナリティを持つ傾向があることが指摘された。対照的に、犬好きな女性は攻撃性が低く、猫好きな女性はより服従的で穏やかであった。また、猫好きの人は男女の別なく、より気遣いのできる人であることが報告された。この研究は、犬猫以外のペットと飼い主のパーソナリティ研究に発展し、検証の結果、鳥の飼い主は満ち足りて礼儀正しく、思いやりのある人々、カメの飼い主は勤勉で信頼でき、

将来性豊かな人々、ヘビの飼い主は仕事に対する忍耐力が低く、変化に富んだライフスタイルを楽しむ人々とされた²¹⁾。しかし、これらの飼育動物の種類とパーソナリティ特性について、すべてを判断できるものではなく、動物飼育がその人の特性にも影響を及ぼすという考えかたをすべきであろう。

動物との共生の歴史を概観すると、人間は1万2千年から1万4千年くらい前から犬と暮らし、猫とは4千年くらい前から暮らし始めている²²⁾。また、家畜としての動物飼育、何かの目的や道具としての動物に接した時代と異なり、現在はある種のパートナー（partner）もしくはコンパニオン（companion）として心を支えあう仲間としての存在となっている。猫カフェ来場者に飼育経験のある者が多いことから、動物に対して関心と期待のある者が「猫カフェ」に来たということがいえよう。

2. 猫カフェの効果

1) ふれあいと感想から見る効果

猫カフェで、実際に「猫とどのようにふれあったか（複数回答）」（有効回答数：110）では、最も多かったのは「触った」83名（75.5%）で、次いで「見た」75名（68.2%）であり、「一緒に遊んだ」22名（20.0%）や「抱っこした」8名（7.3%）は少なかった（図6）。猫カフェでの行動と飼育経験に有意な差は見られなかったが、「抱っこした」に関しては、猫の飼育経験のある者

表4. 「猫カフェ」での体験と猫の飼育経験との関連

飼育経験 \ 体験	触った	見た	一緒に遊んだ	抱っこした
猫の飼育経験あり	n.s.	n.s.	n.s.	***
猫の飼育経験なし	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
動物飼育経験あり	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
動物飼育経験なし	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

***: $p < 0.01$

とそうでない者に有意差 ($p < 0.01$) が見られた (表4)。

身体的接触がなくとも動物をみるだけで、つまり猫や犬が物理的にいるだけで、緊張が低減され、触れることによって、さらに強いリラクセーション効果が生まれる²³⁾。社会的心理的水準においては、ペットがいるだけでも十分なリラクセーション効果があるが、接触することで、血圧が顕著に低下し十分なリラクセーション効果が得られる。その効果は、他の人と話す、読書をする等、リラクセーション効果のある活動よりも大きく、さらに日常的に動物に関われば関わるほど、動物と関わって得られる効果は大きい²⁴⁾。このように、動物による人の心身への影響については多様な効果が分析されてきた。

ところで、猫は人間の微妙なからだの動きや匂いに敏感で、猫好きの人間を見分けることができ、猫好きの人により近寄る傾向があることが確認されており²⁵⁾、「猫

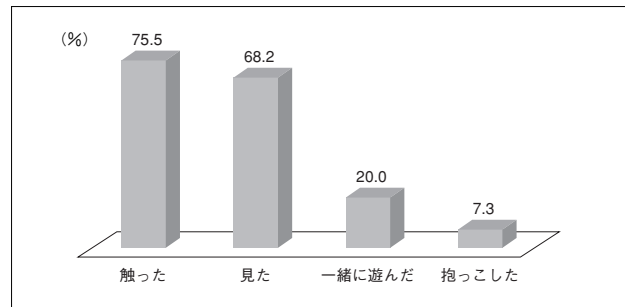


図6. 「猫カフェ」での体験

カフェ」でも猫自身が猫の飼育経験がある人を見分け、猫から積極的に近づき抱っこする行動につながったことが考えられる。このため「抱っこする」という活動で、猫の飼育経験の有無による差が生じたものと考えられた。

猫カフェの「感想 (複数回答)」(有効回答数: 110) は、「かわいかった」81名 (73.6%) という猫の愛らしさに対する感想が最も多く、「癒された」72名 (65.5%)、「和んだ」69名 (62.7%)、「落ち着いた」42名 (38.2%)「気持ちよかった」33名 (30.0%)「安心した」22名 (20.0%)という癒しや心地よさに関するもの、「ふわふわしていた」58名 (52.7%)「やわらかかった」51名 (46.4%)「温かった」41名 (37.3%)という猫にふれた触感、「楽しかった」39名 (35.5%)「うれしかった」35名 (31.8%)という喜びについての感想が多く得られた (図7)。

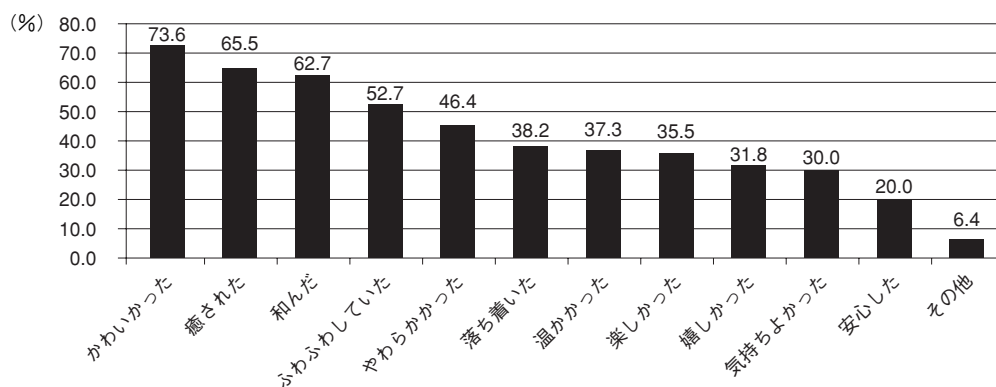


図7. 猫カフェ体験の感想

2) 猫カフェ体験の感想と活動との関連

感想と、猫とのふれあいの関連についてまとめたものが表5である。

猫を「触った」では「ふわふわしていた」($p < 0.01$)「やわらかかった」($p < 0.01$)「温かった」($p < 0.01$)という猫に触って直接的に感じたであろう触感と「落ち着いた」($p < 0.01$)「気持ちよかった」($p < 0.01$)という癒しや心地よさに関する項目で有意差が見られた。

「抱っこした」でも、同様に「気持ちよかった」($p < 0.01$)という心地よさに関する項目で有意差が見られた。「一緒に遊んだ」では「ふわふわしていた」($p < 0.01$)という触感と「和んだ」($p < 0.05$)と癒しに関する項目で有意差がみられた。

温かく、毛で覆われた動物に触れることについて、心臓手術後の患者の回復を促進することが観察されている²⁶⁾。つまり、動物に触れることは触れる人の心臓血管

表5. 猫カフェの体験の感想と猫とのふれあい

感 想 \ 体 験	触った	見た	一緒に遊んだ	抱っこした
か っ ち っ た	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
癒 さ れ た	n.s.	**	n.s.	n.s.
和 ん だ	n.s.	n.s.	**	n.s.
ふわふわしていた	***	n.s.	***	n.s.
やわらかかった	***	n.s.	n.s.	n.s.
落 ち つ い た	***	n.s.	n.s.	n.s.
温 か っ た	***	n.s.	n.s.	n.s.
楽 し っ た	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
う れ し っ た	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
気 持 ち よ っ た	***	n.s.	n.s.	***
安 心 し た	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

***: $p < 0.01$, **: $p < 0.05$,

系に直接影響を与えるような効果を持つ。動物に触れることで、高い鎮静効果が得られ、きわめてリラックスした状態になる²⁷⁾。一方、Jenkins (1986) は、20歳から70歳を対象に、関係性が築かれており、絆が深い犬の場合と、よく知らない犬とでの比較研究を行い、対象者と動物の関係性によって効果が異なることを明らかにした²⁸⁾。しかし、本研究においては、初めて出会った猫であっても、猫カフェという場でともに過ごすことによって十分な効果を得られたと考えられた。また、「抱っこした」以外に、猫の飼育経験の有無による違いが見られなかったことから、猫カフェという一時的な出会いの場であっても、「猫」の存在に目を開かせ、猫への興味を引き出すことができたといえよう。

「見た」では「癒された」に有意差 ($p < 0.05$) が見られ、猫を見るだけでも癒し効果のあることが明らかとなった。先に述べたように、猫等の動物がいるだけでリラクセーション効果が得られ、身体的接触がなくとも、心拍数や血圧等の不安水準を示す身体的指標が変化することが確認されている²⁹⁾。また、人は丸い目を持つ毛のむくむくした動物を見ただけで癒しを感じ、周囲の人と容易になじみ話し合うことができる社会的潤滑油効果を持つ³⁰⁾。猫カフェにおいては、猫と一緒に空間にいただけでも十分な癒し効果が得られ、猫を触ったり、一緒に遊んだり抱っこすることによって、直接的な接触による心地よさが得られ、癒し効果が促進されることが明らかになった。

なお、猫カフェで用いた猫は「Ⅱ 方法」で述べたように、技能を獲得した猫であったが、「猫カフェ」当日に、積極的に活動できなかった猫もいた。動物による心

身の健康への影響は二者の相互作用によるものという影響過程³¹⁾から考えると、人が見て、触れ、話しかけ、抱っこし、遊ぼうとしてもそれにうまく応えられる猫と応えられなかった猫とで、来場者の体験や感想に影響したことが推測できる。

写真1 初めて出会った人に 写真2 じっとしている
抱っこされる虎々冬 虎々冬

3) 飼育希望の変化

「今後、動物を飼いたいかな」(有効回答数: 112) については、全体的には「飼いたい」89名 (79.5%)、「どちらでもない」21名 (18.8%)、「飼いたいと思わない」2名 (1.8%) であった。

飼育希望の変化 (有効回答数: 110) をみたところ、表5のようになった。飼育経験の無い者の内、9名に「今後飼いたい」という変化が見られた。これまで動物にあまり関わる機会の無かった者が、「猫カフェ」での体験によって、飼育希望を持つようになったと考えられた。飼育経験の無い者への動物への興味関心や動物飼育への意欲を喚起する上で、「猫カフェ」体験は有効に働くことがうかがえた。

一方、現在、飼っている者でも、今後はどちらともいえないという回答や、過去に飼育経験があっても今後はどちらでもないまたは飼いたいと思わないという回答も見られた。このことについて、猫カフェでの体験に満足している者でも、今後の飼育について迷いが見られたことから、ペットロス (loss of pet) との関連が考えられた。

ペットロス (loss of pet) とは文字通り「ペットの喪失 (たいていの場合は死別)」である³²⁾が、ペットを亡くしたときに、友人の死と同様に苦しみ、時には友人の死以上に悲嘆が過剰になり、病的な状態となり、専門家の支援を必要とすることもある³³⁾。どの動物であっても、人間に比べると短命であり、ペットとの死別は、動物を飼育する者が当然体験することといえる。あるいは、ペットが逃げたり迷子になったり、家族にアレ

ギーが発見されたり、人間の都合でペットを手放さなければならぬときもあるが、いずれの理由にしろ、ペットを失うことはきわめて抑うつ的な体験となり得る。

飼育経験者は、動物飼育の喜びとともに、動物を失うことの不安や悲しみを感じており、単純に「今後も飼いたい」と回答できなかったものと考えられた。また、猫カフェでの猫とのふれあいから、改めて動物に関わることの責任や重さを感じたともいえる。

表6. 飼育経験と飼育希望 (N=110) 単位: 名

	今後 飼いたい	どちらでも ない	今後飼いたいと 思わない
現在飼っている	43	6	0
飼ったことがある	35	9	2
飼ったことがない	9	6	0

一方、親しい人を亡くした人間に対する飼育動物の効果を確認されており、飼育動物によって、親しい人の死に対する心理的・身体的苦痛を軽減し、苦しみを取り払い、抑うつ状態を軽減したことが報告されている³⁴⁾。つまり、飼育経験者はペットロスに対し、情緒的な苦痛を感じるが、飼育動物は、親しい人を亡くした人間の支えともなる。

3. まとめ

本研究では、以下の点を明らかにすることができた。

1. 来場者の86.0%に動物の飼育経験があり、26.5%に猫の飼育経験があったことから、動物に興味関心の有る者が猫カフェに訪れたといえる。なお、飼育経験に関して、居住形態や出身地による違いは見られなかった。
2. 猫カフェでの体験は、「触った」(72.8%),「見た」(65.8%)が多く、「一緒に遊んだ」(19.3%)や「抱っこした」(7.0%)は少なく、「抱っこした」者には、猫の飼育経験を持つ者に有意差 ($p < 0.01$) がみられた。
3. 来場者の感想の「かわいかった」(71.1%)から猫の愛らしさ、「癒された」(63.2%),「和んだ」(60.5%)等からリラクゼーション効果、「ふわふわしていた」(50.9%)「やわらかかった」(44.7%)等からのリラクゼーションに結びつく触感、「楽しかった」(34.2%)「うれしかった」(30.7%)から喜びが得られた。
4. 猫とのふれあいと感想では、ふれあいの内容によって特性が見られた。しかし、猫を「触った」「抱っこした」「一緒に遊んだ」で、直接的な触感の心地よさ

やリラクゼーション効果が得られたが、猫を「見た」だけでも、リラクゼーション効果が得られた。

5. 「猫カフェ」という場で初めて出会った猫に対して、来場者はリラクゼーション効果を得、喜びを感じていた。

6. 猫カフェで過ごしたことによって、動物を飼いたいと思う者が増加した。

これらの結果から、「猫カフェ」滞在型AAEは、初めて会う猫であっても、来場者の気分に影響を及ぼし、リラクゼーション効果につながることで、および動物や動物飼育に対する興味関心が高まることが示された。

IV. おわりに

“The smallest feline is a masterpiece.” (小さな猫は自然が作った最高傑作である)とは、イタリアの天才レオナルド・ダ・ヴィンチの言葉であるが、大学祭企画「猫カフェ」においても、このことばが真実であることが示されたのではないかと。

来場者が猫たちに魅せられ感じた癒しや喜びを解析し、十分に本稿で述べることができたかという点では課題が残る。今後、さらに研究を継続し、動物と人間の相互作用について分析していきたい。

付記 本研究は、平成20年度「私立大学等経常費補助金 特別補助 地域共同研究支援」・北翔大学「北方圏学術情報センター研究費」の助成を受けて実施された。

《引用文献》

- 1) Levinson, B.M.: The value of pet ownership. proceedings of the 12th Annual Convention of the Pet Food Institute, 1969, pp. 12-18, Levinson, B. M. Pets and Human Development, Springfield, IL: Charles C. Thomas, 1972
- 2) 岩本隆茂・福井至: 1 アニマルセラピーの歴史, アニマルセラピーの理論と実際, 倍風館, p. 6-20, 2001
- 3) Porsky, R.H., Hendrix, C., Mosier, J.E. & Samuelson, M. L.: Children's pets and adults' self-concepts, The Journal of Psychology, 122, pp. 463-469, 1988
- 4) Zasloff, R.L. & Kidd, A.H.: Loneliness and pet ownership among single women. Psychological Reports, 75, pp. 747-752, 1994
- 5) 中川美穂子: 小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて, お茶の水大学子ども発達教育研究センター紀要, 4, pp. 53-

- 65, 2007
- 6) 峯崎友香里：ホースセラピーの実際，帝塚山大学，pp. 45-52
- 7) 要武志・村田英一・太田光明：重複障害児への馬を用いた動物介在活動の試み，麻布大学雑誌，第7・8巻，79，
- 8) 「猫が待つ癒しカフェー首都圏で続々」，朝日新聞，2008年8月15日付夕刊，第3版，第14面
- 9) Purvis,M.J.,&Otto,D.M. “Household Demand for Pet Food and the Ownership of Cats and Dogs ; AnAnalysis of aNeglected Component of U.S.Food Use.” Staff paper, 76-83, Depertment of Agriculture and Applied Economics, University of Minesota,St.paul, 1976
- 10) A.H. キャッチャー・A.M. ベック（コンパニオン・アニマル研究会訳）：コンパニオンアニマル人と動物のきずなを求めて，誠信書房，1994
- 11) Albert,A and Buicroft,K : Pets and urban life. Anthrozoos, 1(1), pp. 9-25, 1987
- 12) 同上
- 13) Endenburg, N.,Hart,H and de Vries,H.W. : Differences between owners and non-owners of copanion animals.Anthrozoos, 4(2), pp. 120-126, 1992
- 14) Koller, M.R. : Families, A Multigenerational Approach, New York, McGraw-Hill, 1974
- 15) 前掲書 9)
- 16) St.Yves,A.,Freeston,M.H.,Jacques,C.and Robitaille, C. : Love of animals and interpersonal affectionate behavior.Psychological Reports, 67(3 Pt2), pp. 1067-1075, 1990
- 17) 日本ペットフード工業会調査 (2007)
- 18) 内閣府調査 (2003) 動物愛護に関する世論調査
- 19) Frost & Sullivan : Pet Care Products... Foods, Health, and Grooming Aids and Pet Accessories. New York, 1980
- 20) Kidd, A.H. and Kidd, R.M. : Personality characteristics and preferences in pet ownership.Psychological Reports, 46, pp. 939-949, 1983
- 21) B. ガンター (安藤孝敏・種市康太郎・金児恵訳)：第2章 飼い主は他の人々と違うのか？，ペットと生きる，北大路書房，2006
- 22) 前掲書21) 第1章 なぜ人はペットを飼うのか？
- 23) Grossberg, J.M., Alf, E.E. and Vombrock, S.K. Does pet precence reduce human cardiovascular response to stress? Anthrozoos, 2(1), pp. 38-44, 1988
- 24) Vobrock, J.K. and Crossberg, : Cardiovascular effects of human-pet dog interaction. Journal of Behaviorurral Medicine, 11, pp. 509-517, 1988
- 25) Derbyshire, D. : Love him or loathe him, telepathic Tiddles can tell. Daily Mail, 1998, 3 September, p17
- 26) Lynch, J.J., Tomas, S.A., Paskewitz, D.A., Katcher, A.H., and Weir, L.O. : Human contact and cadiac arrhythmia in a coronary care unit . psychosomatic Medicine, 39, pp. 188-199, 1977
- 27) Baum, M.M. et al. , 1984, op. cit. Friedman, E., Katcher, A.H., Lynch, J.J., and Tomas. S.A. : Animal copanion and one-year survival of patients after discharge from a coronary care unit. Public Health Reports, 95(4), pp. 307-312, 1980. Katcher, A.H. , 1981 , op. cit.
- 28) Jenkins, J.L : Psychological effects of petting a companion animal. Psychological Reports, 58(1), pp. 21-22, 1986
- 29) 前掲書23)
- 30) I. Robinson 編集 (1997) 人と動物の関係学：インターズー，15
- 31) 前掲書2)
- 32) 同上
- 33) 前掲書21) 第9章 ペットロスにどう対処するのか？
- 34) Akiyama, H., Holtzman, J.M. and Britz, W.E. : Pet ownership and hearth status during bereavement., Omega : Journal of Death and Dying, 17, pp. 187-193, 1986

Animal Assisted Education: Influence of a Cat Café held at a university Festival

Yoko IMANO Hokusho University Hokusho University Northern Regions Academic Information Center

Ryoko OGATA Hokusho University Hokusho University Northern Regions Academic Information Center

Abstract

How people feel when they visit a cat café? Students held a cat café designed for AAE (animal assisted education) at a university festival. Participants were 114 guests (84 women and 30 men: mean age 21 years) who visited the cat café and responded to a questionnaire. The results indicated the following. From the sample, 98 guests (86.0%) had kept a pet and 26 (26.5%) among them had kept cats. In the café, 83 guests (72.8%) touched the cats, 75 guests (65.8%) watched the cats and 22 guests played with the cats, whereas only 8 guests held the cats in their arms. The guests had feelings such as "cats are lovely," "felt healed by cats," "felt harmonious with cats," "cats were light," "cats were soft," "were happy with cats," and "were joyful with cats". These feelings were indicative of relaxation. Even those who interacted with cats for the first time in the cat café felt relaxed. The guests tended to want to keep pets as a result of the experience of visiting the cat café.

Keywords : animal assisted education, cat café, relaxation